

白秋アートギャラリー (2)

煙草のけむり

薄葉
茂

日本人の喫煙率が二割ほどになったこのご時世、数年前に煙草をやめた私にとっても煙たい話であるが、かなりの愛煙家だったことで知られる北原白秋の煙草を描いた表現に目が留まった。詩集『邪宗門』に「煙草」と題する二十行の作品がある。

黄のほてり、夢のすががき、

さはあまきうれひの華よ。

ほのに汝を嗅ぎゆくここち、

キュラッオの酒もおよばじ。

冒頭のこの四行で白秋は煙草について、憧れの女性に語りかけるように、美の限りを尽くして言い表す。甘く憂いを帯びた華であり、香りは西洋の果実酒も及ばない。そんな耽美的な言葉を荘嚴な五七調で紡ぎ出している。

『邪宗門』が世に出た明治時代は欧米の紙巻き煙草や葉巻が輸入され、小箱の斬新な絵やデザインが日本人を驚かせた。西洋文化に憧れるだけでなく、思いをより魅力的な

言葉に変換させる技が白秋にはあった。

私の故郷、福島県はかつて国内屈指の葉たばこ産地。母の実家は農家で、米のほかに葉たばこを栽培して専売公社に納入していた。当時、日本人の喫煙率は八割以上だった。子供の頃の夏休み、収穫後の葉たばこの束を納屋へ運ぶ作業を手伝ったことがある。今も忘れられないのが、手に付いた葉たばこの強烈な臭い。何度洗ってもなかなか消えない。大人になって煙草を吸うようになれば、臭いが「匂い」になってしまふから不思議だ。

白秋は『邪宗門』刊行の十年後、耽美的な表現とは懸け離れた劇中歌の歌詞「煙草のめのめ」を作っている。「雨ふり」でもコンビを組んだ中山晋平が作曲した。

煙草のめのめ、空まで煙せ、

どうせ、この世は癩のたね。

煙よ、煙よ、ただ煙、

一切合切、みな煙。

劇中では西洋の煙草工場で働く女性たちが工場を出て昼食を食べた後、帰る道すがら、かしましく歌う。これは一番の歌詞で、七番まである。「空まで煙せ」と心にたまった鬱憤をけむりとともに「一切合切」吐き出すような歌詞と曲。煙草の美から、女性たちの厳しい労働環境という社会背景を帯びた厳しい現実まで、「煙草のみ」白秋の表現の幅はこんなにも広がった。